

# ニーチェ思想理解のリコンストラクション

菅野孝彦

ニーチェは『ツアラトウストラ』を公開し、『ツアラトウストラ』の書を入り口 (Vorhalle) とする、自らの「私の〈哲学〉」の完成を決意していた。しかし、周知のように一八八九年一月のトリノにおける昏倒により、ニーチェは自らの思想的営為にピリオドを打つこととなる。その結果、「私の〈哲学〉」というニーチェ思想の母屋 (Hauptbau) は、「書かれざるX」として未完となったのである。本稿は、この「書かれざるX」の内実を確定し、その「書かれざるX」より公開された著作や遺稿群を位置づけることの可能性について考えたい。ニーチェの思想を理解するにあたって、ニヒリズム、ルサンチマン、超人、永劫回帰、力への意志、運命愛などの概念を通じて内在的に理解しようとするのではなく、ニーチェ思想の系統樹を根から幹・枝・葉へと向かおうとするのではなく、いわばこの「書かれざるX」を出発点としニーチェ思想の系統樹を枝・葉・幹から根へと逆進し、「書かれざるX」を含めたニーチェ思想の全貌の特質を明らかにする試みである。ニーチェ思想理解のリコンストラクション(再構築)の可能性を、以下考究する。

## 主著構想をめぐって

「一八八八年八月の最後の日曜日」から「一八八九年一月三日」ニーチェは、『ツアラトウストラ』を上梓した後、一八八四年四月七日付フランツ・オーヴァベック宛書簡において、自らの主著構想に關し語っている。

「今私は、一歩一歩着実に多くの分野を通り抜けねばなりません。というのも私は、『ツアラトウストラ』によってその入口を作った、私の〈哲学〉を完成させるために、今後の五年間を用いようと決心したからです。」<sup>(1)</sup>

この文面にみられるように、『ツアラトウストラ』を入口 (Vorhalle) とし、母屋 (Hauptbau) となる「私の〈哲学〉」を主著として打ち立てようとするニーチェの強い決意をみることでできよう。しかし、その想いは一八八九年一月三日トリノのカルロ・アルベルト広場での昏倒により潰えてしまった。この昏倒によってニーチェは思想的営為を停止するからである。オーヴァベック宛書簡における「私の〈哲学〉」完成への決意表明からトリ

ノでの昏倒までの五年あまりの間に、ニーチェは「私の〈哲学〉」となる主著の構想について様々に試行錯誤している。その歩みの変遷・痕跡は遺稿断片を中心として追うことができるが、ここではトリノでの昏倒による思想的営為の停止の直近となる主著構想をとりあげてみたいと思う。

「一八八八年八月の最後の日曜日」の日付を打たれた主著構想に関する断片がある。

「力への意志の計画草案

あらゆる価値の価値転換の試み

・シルス・マリーア

一八八八年八月最後の日曜日

われらヒュペルボレオス人・問題の定礎

第一書 真理とは何か

第一章 誤謬の心理学

第二章 真理と誤謬の価値

第三章 真理への意志

第二書 価値の由来

第一章 形而上学者

第二章 宗教的人間

第三章 善人と善導者

第三書 価値闘争

第一章 キリスト教についての考察

第二章 芸術の生理学

第三章 ヨーロッパのニヒリズムの歴史のために

心理学者の気晴らし

第四書 大いなる正午

第一章 生の階序の原理

第二章 二つの道

第三章 永遠回帰<sup>(2)</sup>

一八八八年に入り『力への意志』を主著とする構想は、つねにゆれ動いていた<sup>(3)</sup>。妹エリザベートやニーチェの助手をつとめたペーター・ガストらによつて、ニーチェ没後に出版されたグロースオクターフ版『力への意志』は、さしあたり遺稿を種々の構想断片をもとに編集している。しかしながら、グロースオクターフ版『力への意志』編集においては遺稿断片の削除等の異同があり、ニーチェの遺稿断片を誠実に表現しているとはいえないものである。グロースオクターフ版『力への意志』は、一面ではニーチェ思想の整然とした提示といえるかもしれない。しかし、ニーチェ自身がかかえていた主著構想をめぐるところした混沌的状况を、またニーチェ自身が内に秘めた思索的奮闘の情熱を反映していたかは、はなはだ疑問と言わざるを得ない。この「一八八八年八月最後の日曜日」の構想断片は、時系列的に『力への意志』の表題を見出すことができる最後の構想断片である。

たしかに、その意味で「一八八八年八月最後の日曜日」の構想

断片は、主著『力への意志』構想のメルクマールということができるかもしれない。だが、主著『力への意志』の構想は頓挫してしまう。「力への意志の計画草案 一八八八年八月最後の日曜日」を書き記した後の、八月三十日付け母宛の書簡に次のように書いている。

「私は、再び申し分ないほどに活動しています。望むらくは、もつと暇があればということです。といいますのも、今年の夏片付けられるべきであった、長い間準備されてきた仕事が文字どおりだめになってしまったからです。」<sup>(4)</sup>

「一八八八年八月最後の日曜日」の『力への意志』計画草案は、さらに発展されることはなかった。ただ、『力への意志』を表題とする著作の構想を放棄することは、けつして自らの主著構想・「私の〈哲学〉」を放棄することではなかった。あくまでも、『力への意志』を主著とすることを放棄したのである。事実、ニーチェの主著構想は、『力への意志』を主著とすることを放棄することをもって潰えるものではなく、新たな局面へと向かって行く。「一八八八年八月最後の日曜日」の日付は「八月二六日」である。「八月二六日」から母への書簡の日付「八月三十日」の間に、ニーチェにおいて『力への意志』という主著の表題が放棄されたといえよう。さらに、「九月三日」の日付にも注目してみたい。ニーチェは、「九月三日」に自らに起こったことについて、メタ・フォン・ザーリス宛の九月七日付書簡で述べている。

「九月三日は、まったく注目すべき日です。早くも私は、『あらゆる価値の価値転換』の序文を書きました。多分、これまでに書いた中で最も誇りに満ちた序文です。」<sup>(5)</sup>

「八月二六日」の『力への意志』構想案では副題とされた『あらゆる価値の価値転換』の表題が、「九月三日」の日付をもって新たな主著構想の表題となっている。「八月二六日」から「九月三日」までの短時日に、表題を『力への意志』とする主著構想が披瀝されたが放棄され、新たな表題の主著構想が提示されたのである。「構想」レベルでの変化とはいえ、短時日に起こったという点では、ニーチェの精力的な思索活動の激しさを見ることができよう。やはり母屋 (Hausbau) となる「私の〈哲学〉」をめぐる様々な試行錯誤が続けられていたのである。

「一八八八年八月最後の日曜日」の構想断片は、遺稿第十八群の最後の断片であり、「一八八八年八月最後の日曜日」構想に続く新たな主著構想は、当然第十九群の断片群にみられることになる。そこには、以下のような構想断片が連なって現われてくる。

1912[Ⅲ]

「あらゆる価値の価値転換

フリードリッヒ・ニーチェ著

1913[Ⅳ]

「明後日のための思想

わが哲学の抜粋

明後日のための知恵

わが哲学の抜粋

小における大

ある哲学の抜粋」

1914(Ⅷ)

「一 我らヒュペルボレオス人

二 ソクラテスの問題

三 哲学における理性

四 どのようにして、〈真なる世界〉が寓話となったか

五 反自然としての道徳

六 四つの大きな迷妄

七 われわれの味方—われわれの敵

八 デカダンス宗教という概念

九 仏教とキリスト教

十 わが美学より

十一 芸術家と著述家と

十二 箴言と矢」

われわれがまず注目すべきことは、1912(Ⅷ)において初めて「あらゆる価値の価値転換」が著作の表題として掲げられたことである。1913(Ⅷ)はニーチェがこれまで書きためた断片から抜粋・整理を行なうための表題と思われる。1914(Ⅷ)の構成は刊行された『アンチクリスト』『偶像の黄昏』の書における章立ての

一部に対応している。

グロイター版の編者マッツィノ・モンティナリによれば、印刷用原稿の表題に基づくと上記の「一、七、八、九」の各項は、それぞれ『アンチクリスト』の「第一節から七節」「第八節から十四節」「第十五節から十九節」「第二十節から二十三節」に対応している。『アンチクリスト』は六十二節からなっているが、その三分の一以上がここに現われている。また、残りの「二、三、四、五、六、十二」は『偶像の黄昏』の各章に対応する。「十、十一」は、『偶像の黄昏』の「ある反時代的人間の遊撃」の章の印刷用原稿に用いられた表題である。それぞれが、「ある反時代的人間の遊撃」五十一節中の「第一節から十八節」「第十九節から三十一節及び第四十五節から五十一節」に対応する。これらの断片を「著わし、『あらゆる価値の価値転換』の序文を書いた」と九月七日のメタ・フォン・ザーリス宛書簡においてニーチェは伝えているのであった。

モンティナリは、「一八八八年八月の最後の日曜日」(八月二六日)から九月三日の間に起こった主著構想をめぐって生じたニーチェの変化について、次のように述べている<sup>6)</sup>。もちろん、母宛書簡での落胆の念も念頭に置かれている。

一 ニーチェは、この間に『力への意志』の構想を最終的に放棄した。

二 清書の終わった手持ちの材料から、『あらゆる価値の価値

転換』として出版する可能性を考慮していた。

三 しかしニーチェは、自分の哲学の「抜粋」の公刊を決心していた。

四 その「抜粋」に『一心理学者の怠惰』後の『偶像の黄昏』という名を与えた。

五 その後すぐに、「抜粋」の中から19[4](VIII)における「一七、八、九」の各章を取り除いた。

六 主著は、この後「あらゆる価値の価値転換」の表題を担うことになった。それは四書で計画され、それらのうちの第一書が『アンチクリスト』であり、その三分の一は完成していた。

七 一八八八年九月三日、ニーチェは『あらゆる価値の価値転換』の序文を書いた。

モンテイナリの指摘にみられるように、ニーチェによる一連の主著構想をめぐるこの短時日での動きが意味しているのは、明らかに彼の著作構想が『力への意志』の表題から『あらゆる価値の価値転換』の表題へと移行しているということである。こうした主著をめぐる方向転換をこの時期の書簡が裏付けてくれる。

ニーチェは、九月十四日付でオーヴァベックに次のように語っている。

「私は、いままで以上にほぼ自分の軌道に乗って大目標に近づいているという大きな落ち着きと確信を感じています。自分自

身に驚いているのですが、私は『あらゆる価値の価値転換』の第一書を決定的な形でもう半分書き上げてしまいました。それは、どんな哲学者によっても獲得されたことのないようなエネルギーと透明さをもっています。私は、突然書くことを覚えたかのようなです。問題の内容、情熱の点では、この著作は数世紀の時を駆けるほどのものです。第一書は、内緒の話ですが、『アンチクリスト』という名であり、いままでキリスト教批判のために考えられてきたことのすべてが、まったく児童にも等しいものとなります。」<sup>(7)</sup>

『あらゆる価値の価値転換』を表題とする新たな主著構想のもとで、ニーチェは精力的に活動する。少なくとも、『アンチクリスト』の残りの部分の執筆、そしてこれを第一の書と位置づける『あらゆる価値の価値転換』の第二書、第三書、第四書の執筆にとりかかっていたことは疑い得ない。『偶像の黄昏』の序文における日付が示すように、『あらゆる価値の価値転換』の第一書である『アンチクリスト』が、こうして一八八八年九月三十日に完成する。この時期、新たな主著『あらゆる価値の価値転換』を四部構成で構想する構想断片がみられる。

19[8](VII)

「あらゆる価値の価値転換

第一書

アンチクリスト。キリスト教批判の試み

## 第二書

自由精神。ニヒリズムの運動としての哲学への批判

## 第三書

インモラリスト。最も不幸な無知の一種といふべき道德への

批判

## 第四書

ディオニュソス。永遠回帰の哲学」

## 22[4]Ⅳ

「あらゆる価値の価値転換

アンチクリスト キリスト教批判の試み

インモラリスト 最も大きい禍いを招く無知、すなわち道德

への批判

我ら肯定者 ニヒリズムの運動としての哲学への批判

ディオニュソス 永遠回帰の哲学

七つの孤独からのツアラトウストラの歌」

これらとともに、『あらゆる価値の価値転換』の第一書を『アンチクリスト』が担い、他の主題は「ニヒリズム」「道德」「ディオニュソス（永遠回帰）」に関してで構成されている。その限りにおいて、ニーチェの著作構想はここに収斂するかのようである。事実、ニーチェは、この精神的に多産な秋を愛でるかのよう、十月十八日の書簡でオーヴァベックに語っている。

「いよいよ私の大いなる収穫の時が、やってきたのです。これ

ほど大きな問題に手を出すものはほとんど誰もいなかったのに、それが私にとってはやすやすと成就してしまうのです。『あらゆる価値の価値転換』の第一書が完成し、後は印刷に回すだけであることを、名状しがたい気分であなたに報告します。『転換』は四書からなり、別々に出版されることになりました。」<sup>(8)</sup>  
このような思想的に多産な日々において、ニーチェは『アンチクリスト』『偶像の黄昏』『この人を見よ』の完成をみることになる。しかしながら、こうした多産の秋を迎えているにもかかわらず、彼においては再度の著作構想の転換が生じる。『あらゆる価値の価値転換』の第一書として位置づけられていた『アンチクリスト』が、『あらゆる価値の価値転換』の書そのものとして語られる。十一月二六日付でパウル・ドイッセンに宛てた書簡から、その著作構想の転換について知ることができる。

「私は、人間というよりダイナマイトなのです。『アンチクリスト』という主題の『あらゆる価値の価値転換』は、完成しています。この二年のうちに、これを七か国語に翻訳することに着手し始めます。各国語の初版は、およそ百万部になります。それまでに、以下の著作が出版されます。『偶像の黄昏 いかにして人はハンマーをもって哲学するか』『この人を見よ 人はいかにしてあるところのものになるか』——この書は、私自身を扱っています。」<sup>(9)</sup>

『あらゆる価値の価値転換』の書は『アンチクリスト』の書とな

り、『あらゆる価値の価値転換』を主著とする構想は背景に退いた感がある。むしろ『あらゆる価値の価値転換』という表題は、主著として他の著作を主導するものではなく、『偶像の黄昏』『一人の人を見よ』と同列に並ぶ書にはかならないことになる。この時期に『力への意志』や『あらゆる価値の価値転換』という主著とも想定された表題を背景に退かすことは、大局的に見れば一つの戦術転換といえることができよう。『ツアラトウストラ』を入口(Vorhalle)とし、母屋(Hauptbau)となる「私の〈哲学〉」を主著として打ち立てようとするニーチェの決意は揺るぎなく、自らの哲学の母屋となる新たな主著構想に向かうのである。しかし、こうした戦術転換を許さぬ事態が生じたのであった。本人にとっても予想だにできなかったであろうトリノのカルロ・アルベルト広場での昏倒である。ニーチェの思想的営為にピリオドが打たれたのであり、彼の意思に反して主著としての「私の〈哲学〉」の実現はかなわぬこととなった。

## ニーチェ思想理解のリコンストラクション

ニーチェ思想を一本の系統樹にたとえるならば、公刊された諸著作は枝・葉・幹・根を形成する。ニーチェの思想的営為が病により終止符が打たれ結果、「書かれざるX」としてのこの思想系統樹の頂点がニーチェ自身の手で提示される機会は永遠に失われたのである。ニーチェ思想の母屋(Hauptbau)となるこの「私

の〈哲学〉・「書かれざるX」は、ニーチェ思想研究の泰斗の一人であるカール・レーヴィットの言葉である「魂の未開地(Neuland der Seele)」<sup>(10)</sup>の語で表されよう。

ニーチェは、

「この新しい魂は、謳うべきであった。語るべきではなかった。あのとき私が、言わねばならなかったことを詩人として言わなかったのは、なんと残念なことであつたらうか。たぶん私には、それが出来たであらうに。」<sup>(11)</sup>

と、自らの著作や遺稿による思想表現の不十分さについて語っている。未完となったニーチェの語ろうとし謳おうと欲した地が、レーヴィットの言うニーチェ思想における「魂の未開地」・「書かれざるX」である。先駆するならば、ニーチェ思想における「魂の未開地」・「書かれざるX」の内実は、人間にとつての「内的世界の不可欠性」であらう。

「内的世界の不可欠性」を謳うという観点は、既成のキリスト教や道徳への痛烈な批判者というニーチェ像からすれば違和感を覚えるかもしれないが、人間にとつての「内的世界の不可欠性」をニーチェは語ろうとしたのである。そのことを証左するアフオリズムがある。Positivismus と Idealismus を並置するアフオリズムである。

「Positivismus を完全に自分自身のうちに受け入れること、そして今なおかつ Idealismus の担い手であることが必要である。」<sup>(12)</sup>

このアフォリズムは、『人間的なあまりに人間的な』の遺稿中に見出される。

このアフォリズムにおいて、Idealismusの担い手であることの必要性が説かれるが、あくまでPositivismusと並置されるところでのIdealismusを意味している。(14)のIdealismusとしての「内的世界」は、Positivismusとの並置において位置づけられる。

Positivismusと並置されない単なるIdealismus<sup>14</sup>「既存のあらゆるIdealismus」は、Positivismus的な「必然的なもの」からの逃走であり、嘘いつわりといわれる。「Positivismusを完全に自分自身のうちに受け入れること」とは、Positivismus的な「必然的なもの」を直視することを意味する。プラトン主義の歴史を語るハイデガーによれば、ニーチェのこの「内的世界」は「超感性的なもの(Ubersinnliches)」ではない「非感性的なもの(Nichtsinnliches)」の世界となる(15)。Positivismusの世界は、人間の住まう現実世界にほかならない。ニーチェにとって、「内的世界」は必然的なPositivismusの世界とともにある。かくして「初めて感性的なものを肯定し、同時に精神という非感性的の世界を肯定する道が開かれる。」(14)△PositivismusとIdealismusの並置における「非感性的なもの」としてのIdealismusの保持が、自らの生を放棄することなく生に豊穡さをもたらそうとするニーチェ思想の核心となる。

△PositivismusとIdealismusの並置における「非感性的なもの」

としてのIdealismusの保持が、ニーチェにとつての「内的世界」である。この「内的世界」の一端を語るうえで、画家フィンセント・ファン・ゴッホを取り上げてみたい。絵画作品は、画家自身の「塗り込められた内面」(15)にほかならない。画家は、絵画の美と自己の精神の内面とをつねに相互に喰ひこませて考えつづける(16)。絵画作品が、言語的思想表現を補足するばかりでなく、言語的思想表現と等値となり、さらには言語的思想表現を凌駕しさえするのでないかとすら思われる。絵画作品に、自らの内面を塗り込める画家たちを、すなわち投錨する錨をもつこともなく自らの人生を一つの運命・宿命と直視し日々を過ごす一人の人間の実存する姿を、鮮烈なその「内的世界」を見ることができるのである。

一八八九年五月ゴッホ自身の意思で入院したサン・レミの精神病院では、襲いくる発作との絶えざる闘いに、また、永遠に正気を失ってしまうかもしれないという恐怖との闘いには費やされた。

「人生は、こうして過ぎて行く。時は再び還らない。ところが、僕は飽くまで仕事に没頭している、仕事の機会は再び来ないと承知している、まさにその理由によつてだ。とくに僕の場合では、もつと烈しい発作が、やがては、恐らく絵を描く僕の力を、永遠に破壊してしまうであろう、そういう次第であつてみればね。」(17)



この闘いは、「傷ついた自分の精神をはっきりと意識しながら、最後の一点ですべての崩壊を支えようとする驚くべき精神の努力と苦闘」(18)にほかならない。ゴッホが仮託する人間の姿は、雄々しくというよりも黙々と様々な困難に立ち向かっていく「種まく人」の姿であった。

「僕は、自分の考えがたしかなものとなり、ゆるぎない方向に進んでいくこと……を望んでいる。『神の言葉を種まく人』僕はそういう人になりたいと思っているが、その人にとつては、ちようど畑で種まく人の場合と同じように、毎日がそれなりの悩みをもたらすだろう。」(19)

ここに示されているのは、他者とのあつれきを繰り返すゴッホの姿でも、病に落ちた失意のゴッホの姿でもない。それは、不可避的な死をも内包する不安にみちた存在と自覚し、今現にあるところのものをまっすぐに肯定する存在である。「ただ眼前に与えられたものしか生きる糧のない事を、つねに感じている人」(20)として、ゴッホは言う。

「人生とは、実に呆れ返った実在だ。僕等はみんな、こいつに向かつて何処までも追い立てられる。物事は、あるが儘にある。陰気に考えようと陽気に考えようと、物事の性質は変わりはない。」(21)

「自然との不断の格闘」(22)において自然の刻印を受け、人間は「生活の堅い地盤」(23)の上に立つことができる、とゴッホは考

える。しかしながら、この「堅い地盤」が、有様としてゆるぎない確固とした地盤を意味するものではないかもしれない。なぜなら、明らかであるのは、ゴッホを取りまく現実の生活があるということのみであり、その現実の有様は、けつして確固としたものではなく、様々に変容しゴッホを翻弄してやまないからである。牧師としても画家としても成功が実を結ぶことなかったゴッホにとって、現実是不確定であり続けたのであり、逆説的には、不確定であること・浮動的であることこそが、彼にとつてあるが儘の現実の証であつたといえよう。現実世界のこうした有様は、ニーチェの思想的文脈にそうならば、「在るように、成るの思想 (wie man wird, was man ist)」(24)の観点にほかならない。現実世界は、「在るところのもの」として、われわれの逃れることのできない、「必然的なもの」としてわれわれの眼前に広がる。「必然的なもの」「在るところのもの」として、現実世界は重みも軽みもない。しかしゴッホにおいて、というよりもわれわれのすべてにおいて、さしあたりそれらは、重荷を背負つて砂漠へ急ぐラクダにおいてと同じように重くのしかかるものかもしれない。

「長い間、嵐の海の上で翻弄されるように変転の生活をしてきた者も、ついには目的地にたどり着く。……そうした人間は必ずしも自分が何をなしようかを自分でもわかつていないが、本能で感じている——おれだつて何かの役に立つ人間だ、おれに

だつて生存理由があることは感じているのだ。」<sup>(25)</sup>

この呻吟する姿は、投錨する錨をもつこともなく自らの人生を一つの運命・宿命と直視し日々を生きるゴッホにおいては、画家の道を志しても、さらには自らの人生に終止符を打とうとするときであろうとも変わることはなかったであろうと思われる。「ただ眼前に与えられたものにしかな生きる糧のない事を、つねに感じている人」ゴッホは、「傷ついた自分の精神をはつきりと意識しながら、最後の一点ですべての崩壊を支えようとする驚くべき精神の努力と苦闘」する人なのである。ゴッホの絵画作品は、まさしくそうした「精神の努力と苦闘」を示すのであり、ニーチェの文言を使うならば、△PositivismusとIdealismusの並置における「非感性的なもの」としてのIdealismusの保持の証といえよう。

「魂の未開地」・「書かれざるX」というピースは、たしかにニーチェ思想の数々の他のピースと比べるならば、一枚の小片にすぎないかもしれない。しかし、ゴッホにおいて「すべての崩壊を支えようとする精神の努力と苦闘」と語られるように、この一枚のピースがニーチェ思想全体を駆動させる源泉となる可能性を秘めているといえよう。ハイデガーが述べているように、様々な哲学や思想を駆動させる力への歩みが他の哲学者や思想家たちと同様、ニーチェにおいても見出されるのである。

「哲学は、同時に生きた人格との緊張関係のうちで生き、この人格の深みと生の充実から内実と価値要求とを汲み取る。したが

って、たいていどの哲学的概念の根底にも、哲学者自身の人格的な態度決定が横たわっている。一切の哲学がこのように主体から規定されていることを、ニーチェはその仮借ない苛烈な思考の仕方と彫塑的な叙述の才能によって、△哲学する衝動▽という周知の定式にもたらししたのである。」<sup>(26)</sup>

ここで、ニーチェ思想理解において思想の系統樹を逆進することの可能性について考えたい。ニーチェがニーチェ思想の母屋(Hauptbau)となる「私の〈哲学〉」を目指していたのは明確である。ニーチェ自身が著作として刊行する姿を眼の当たりすることとはできないが、その核心と道具立てを考えることは許されるであろう。ニーチェの「私の〈哲学〉」の核心は、人間にとつての「内的世界の不可欠性」である。その道具立としてみることできるのが、「PositivismusとIdealismusを並置するアフォリズム」と「在るように、成るの思想」である。「PositivismusとIdealismusを並置するアフォリズム」と「在るように、成るの思想」を両輪にし、ニーチェ思想が理解される。これらの観点から、ニーチェ思想の系統樹の頂点から、幹・枝・葉・根へと逆進することが可能となる。ひいては、「私は所詮われらの眼前にあるものとともに一生を生きているのであり、眼前のものがわがいのちに与えられたものであり、これにわが実存を賭ける以外に、私は人であり得ない……」<sup>(27)</sup>という、ニーチェの△哲学する衝動▽をも垣間見ることができるよう思われる。

注

本稿で用いるニーチェのテキストは、*Nietzsche Werke Kritische Gesamtausgabe*, Hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin 1967ff.である。引用箇所は、AbteilungとBandをそれぞれローマ数字とアラビア数字で表し、その後、頁数を示す。なお引用文中の強調文字は、原文におけるゲシユェルットの部分を示している。「」は、引用者の補足である。

- (1) Friedrich Nietzsche: *Sämtliche Briefe Kritische Studienausgabe in 8 Bänden*, Hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari unter Mitarbeit von Helga Arantia-Hass, Berlin 1975ff. (以下、KSBと略記) Bd.8, S.496.
- (2) 18[17] (III) .
- (3) 拙論「ニーチェの主著構想の変遷——一八八八年初頭から一八八八年八月最後の日曜日まで——」『東海大学総合教育センター 紀要』第二五号、二〇〇五年、六一頁。
- (4) KSB Bd.8, S.406.
- (5) KSB Bd.8, S.397.
- (6) Friedrich Nietzsche: *Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*, Hrsg. v. Mazzino Montinari, Berlin 1975ff. (以下、KSAと略記)。
- (7) KSB Bd.8, S.407.
- (8) KSB Bd.8, S.452f.

- (9) KSB Bd.8, S.491f.
- (10) K. Löwith, *Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen*, Stuttgart 1956, S.10.
- (11) 『悲劇の誕生』に加筆し、自らを哲学者として位置づけるべく公刊した一八八五年の「自己批判の試み」(Friedrich Nietzsche: *Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe*, 1980, Berlin, B.1, S.15)で語られている。
- (12) *Nietzsche Werke Kritische Gesamtausgabe*, Hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin 1967ff. IV.2, S.482.
- (13) M. Heidegger: *Nietzsche I*, Pfullingen, 1961, S.241f.
- (14) Ebenda.
- (15) 白矢勝一、吉留邦治『佐伯祐三 哀愁の巴里』早稲田出版、二〇一二年、二二六頁。
- (16) 芳賀徹「高橋由一と岸田劉生」『講座比較文学第四卷 近代日本の思想と芸術II』東京大学出版会、一九七四年、二四四頁。
- (17) 『小林秀雄全集 第十卷』新潮社、二〇〇二年、三八七頁。
- (18) 高階秀爾『ゴッホの眼』青土社、一九八四年、一四頁。
- (19) 同上書、一三四頁(一八七七年四月三十日)。
- (20) 小林秀雄『前掲書』三三三頁。
- (21) 同上書、三〇一頁。
- (22) 同上。
- (23) 弟テオへの手紙に「神に関する固定観念もなく、抽象もなく、ひ

たすら生活の堅い地盤に立って、これに愛着している。」と書かれている。

- (24) 「wie man wird, was man ist.」は、『この人を見よ』の副題に使われている。ピンダロスのピュティア祝勝歌 *Pythian Odes*: II p.72. Sandys, *Loeb classical library* が参照される。「在るように、成るの思想」は、他に『悦しき知識』三三五節等にもみられる。また「在るように、成るの思想」は、運命愛 (*amor fati*) の原型・根幹をなすといえよう。「人間の偉大さを言い表す私の決まった言い方は、運命愛である。すなわち、何事も現にそれがあるのとは別様であって欲しいとは思わぬこと、未来に向かっても、過去に向かっても、そして必然を単に耐え忍ぶだけではなく、永劫にわたっても絶対に別様であって欲しいとは思わないこと。」KGW IV3,S.180.
- (25) 『ファン・ゴッホの手紙』二見史郎他訳、みすず書房、二〇〇一年、四七頁。
- (26) M.Heidegger: *Die Kategorien und Bedeutungslehre des Duns Scotus*, Tübingen 1916, S.4.
- (27) 棟方寅雄『図録 岸田劉生展』東京新聞、一九七〇年。一五七頁。

(かんの・たかひこ 東海大学文学部教授)